

4. コロンビアにおける日本人移民の話—その4

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアの日本人移民の締め括りの話として、彼らが日系人であることによる自己意識、また彼らの困難や苦勞についてまとめたい。

言語、文化、価値観、習慣が異なる地域・国に移住して永住するには当然のことながら、語りつくせぬ苦勞に伴う。カリの65歳になる2世の女性がこう語ってくれた。

証言8 (NB)「私は小さな村で育ちました。罵倒を浴びせられたこともあります。《中国人!》《ブタ野郎!》や、細い目、肌の色が違うことによってでしょうが、それは日本人というからではなく、現地人と異なるというところから言われたのだと思います。彼ら(現地人)は白人か黒人なのです。また、私の両親は、自分の行動に対して厳しく躰けてくれました。すなわち、私の好き勝手放題にはしませんでした。周りの人は私たちが外国人であることに対して注視していたからです。そして、人を思いやる心を持つように育てられたのです。両親は他の人々にははるばる親切だったと思います。そういう生活だったので、年月が経って他の人々は私たちに敬意を払ってくれますし、現在の状況はすこぶる良好なのです」また、三世のカリ在住の女性は次のように語る。

証言9 (NB)「私は三世なので、言葉や適応は問題ありません。ここで生まれ育ったのですから。一方、私と暮らしている祖母は未だ言葉が壁なのでしょうか、外に出たがりません。祖母が若い時代には辛い困難があったと聞きます。女性は男性と同じように農作業をしなければなりませんでしたが、同時に育児をしなければならなかったからです。」さらに、カリの一世男性はこう証言してくれた。

証言10 (NB)「コロンビアは外国人に対して寛大な国だと思いますね。それに、私たち日本人は朝から晩まで毎日、そりゃあもう働きましたよ。色んな事がありました。どうにかこうにか、私たち日系は良い特別なイメージを作り上げたのではないのでしょうか。それが今日にも役立つ感じがします。」

このように、カリ・パルミラの日系人は、確かにコロンビア人社会との間に困難や不快な時期があったと言える。しかし、南部の日系の人たちはこれを努力と団結で克服した。その一方で、コロンビア北部、バランキージャの日系人の場合は、コロンビア社会との諍いは少なかったそうである。というも、彼らが少数でもあり、また配偶者がコロンビア人であったと分析することができるからである。バランキージャの75歳になる二世の男性は言う。

証言11 (NB)「決してイジメや罵倒など一切なかったね。私の記憶だと、親は言葉を知らなくて、村人の中では日本人ということで珍しがられた。ただバランキージャのような大都市に出た時、やはりからかわれたりしたけれども、全然気にならなかったよ。ある時期になると、私たち二世は何というか、恥ずかしさとか不安というか日本人移民の子孫であることのアイデンティティーを考えるとときがあるかもしれない。とはいうものの、ここバランキージャではそういう不安は誰も抱いてはいないと思う。なぜなら、コロンビアでは国籍は関係なく習慣で手厚く人を歓迎します。そういう寛大さを持っている国だし、またそれぞれの人の出生や出身というかその人たちの国に敬意を払うんですよ。」

*コロンビアの日系人と共に：これからの研究課題の入り口

今回、少数とはいえコロンビアの色々な日系人の方と話が出来たことは、大変有意義だった。またそれと同時に、もう少し体系的に、またもう少し時間をかけて調査する必要があることにも気が付いた。日本人の移民の歴史的な経過は、私が考えていたほど単純なものではないのである。

南部のバージェ移民は「農業試験移民」という使命を引き下げていた。事実その使命は果たされ、バージェ県はもとよりコロンビア全国においてもその名は知られている。

バージェ県やバランキージャのほとんどの日本人の子供や孫たち(二世～)は現在、積極的に自分たちは日本人の子孫だということを誇り、日本人意識を持っていると私は感じた。しかしながら、この日本人意識の背景には、日本の近年の発展が存在することを忘れてはならない。歴史に「もしも」というのは存在しないだろうが、もしも日本が経済的に不況であったなら、日系人はどのように祖国の事や日本文化を見たのであろうか? 日本人という意識は保ったのであろうか? 日系人という誇りは持つことができたのであろうか?

また、ここで新たな課題が浮上してきた。国民のアイデンティティーというのはどういう意義をもつのであろうか? というのは、バランキージャの日系人の場合、すでに日本人一世を知らない人々がいるし、日本文化というのを直伝してもらった経験がない。とすれば、彼らは、日本や日本人というののどのよう捉えているのだろうか?

最近、ここ数年日本へ行ったことのある日系人が増えている。彼らは日本文化を体験して、コロンビアに帰国して、文化伝承の新たなサイクルが生じてこようとしている。

インタビューの最後に語ったバランキージャの二世の55歳女性の言葉は、私の心に深く残った。

証言12 (NB)「私の身体の中の血液は100%日本人の血液です。母親は自分の行動を通して私に日本文化を見せてくれました。けれども日本語は教えてくれなかった。だから現在日本語を学んでいるのです。私はコロンビア人というより、日本人という意識を感じています。」

両親の行動によって文化を受け継ぐというのも、一つの伝承の形なのである。

*結び

日系人であることへの不安はアイデンティティーの認識不足からくるのであろう。それゆえ日系人は彼らのアイデンティティーを求めて先祖の国やその歴史・言葉を学ぶのかもしれない。

コロンビアの日系の人々は、現在の日本人が失いつつある文化の大切な点を見出していると思う。文化とはそもそも無形であり、人の行動や考え、また「徳分」の複合物であると、私は考えている。世界どこでも物質文明がはびこり、人々はモノを求めて、またモノや形のあるものしか信じなくなっている傾向がある。しかし、何十世紀も前から、我々日本人は思考、行動、信念、などの無形である文化を築き上げてきた。私は、コロンビアの日系の人たちが、きっと日本の文化の最も重要な要素を見出し、日本文化本来の姿を再発見するような気がしてならないのである。